

アメリカ黒人史における汎アフリカ主義とディアスポラ意識

—マルコムXとガーナを結ぶための予備的考察—

大 類 久 恵

はじめに

1964年5月11日、マルコムX (Malcolm X)は、ガーナの首都アクラの大地をはじめて踏んだ。ガーナは、1957年にブラック・アフリカ植民地で最初に独立を達成していた。ガーナを独立に導き、首相に就任したクワメ・エンクルマ (Kwame Nkrumah) は、対外的には新植民地主義に対する反対運動を展開した。運動の基盤として、エンクルマが推進したのは、汎アフリカ主義運動、すなわちアフリカ諸国の連帯、アフリカの統合であった。国家を越えた地域的統合は、1963年のアフリカ諸国首脳会議において「アフリカ統一機構 (Organization of African Unity、以下 OAU と記す)」の創設という形で結実した。

マルコムXの訪問当時、ガーナは、世界中の黒人¹ にとって「汎アフリカ運動の政治的メッカ」² であった。マルコムXもまた、ガーナを「汎アフリカ主義の源泉」³ とみなし、エンクルマ大統領との会見を、一ヶ月以上にわたる中東・アフリカ歴訪のなかで「最大の榮譽」⁴ であったと回想している。一週間にわたるガーナ滞在は、マルコムXに汎アフリカ主義の理想を確信させた。

帰国から1ヶ月後の6月28日、マルコムXは、政治組織「アフリカ系アメリカ人統一機構 (Organization of Afro-American Unity、以下 OAAU と記す)」を設立した。OAUを意識していたことは、その名称からもあきらかである。アフリカの「統一」を目指す汎アフリカ主義に強く感化されたマルコムXは、OAAU設立目的の筆頭に「西半球におけるすべてのアフリカ系人の統一と連携」を掲げ、「西半球のアフリカ系人の連帯を確立した後、父祖の地に住むアフリカの人々と連携する」⁵ と謳っている。OAAUの創設によってマルコムXは、エンクルマの汎アフリカ主義を西半球の黒人にまで広げる視点を提起した。そのための鍵になるのは、西半球の黒人たちが自らの起源をアフリカに求めて、自身を「アフリカ系人」としてとらえ、自らの運命をアフリカの運命に重ねる「ブラック・ディアスポラとしての意識」(以下、「ディアスポラ意識」と記す)であった。

後にシャーリー・グレアム・デュボイス (Shirley Graham Du Bois) が「第二のアフリカ統一機構」⁶ と呼んだ OAAU は、設立以降、1965年2月にマルコムXが暗殺されるまで、彼の公的活動の基盤となった。理念としての汎アフリカ主義は、マルコムXの原動力であり続けたが、彼が活動半ばで暗殺されたために、さらなる具現化への道を絶たれた。彼が汎アフリカ主義の理想をどのような形で具体化しようとしていたにせよ、志半ばで暗殺されたマルコムXとともに、彼のヴィジョンもまた、永久に葬られることになった。

筆者は、マルコムXの汎アフリカ主義が、世紀転換期以降⁷ アメリカ合衆国社会に内在してきた、黒人大衆のディアスポラ意識の系譜上に現れた、ひとつの帰結点としての可能性を持っていたと考える。本稿は、このような立場に立って、マルコムXが主としてガーナとのかかわりのなかで構築させつつあった汎アフリカ主義を、黒人大衆のディアスポラ意識の系譜上に位置づけるための、予備的な考察である。

本稿ではまず、世紀転換期にカリブ海地域のアフリカ系人によって生み出された汎アフリカ主義を、アメリカ合衆国の黒人が育んだディアスポラ意識のなかに跡づける。次に、W・E・B・デュボイス（W.E.B. Du Bois）が主導した1919年の汎アフリカ会議で示された汎アフリカ主義と、同時期にアメリカ黒人大衆に受容されたマーカス・ガーヴェイ（Marcus Garvey）のアフリカ国家建設論を紹介する。両者を比較しながら、とくに後者に象徴される、黒人大衆のディアスポラ意識を基盤としたアメリカ的なアフリカ観を抽出する。さらに、第二次世界大戦後に開催された第五回汎アフリカ会議以後、汎アフリカ主義がアフリカ化するいっぽうで、冷戦下のアメリカ合衆国において黒人運動が二分化した点を指摘する。こうした歴史的な脈のなかで、ガーナが独立し、マルコムXがアメリカ社会で頭角を現した。まとめとして、マルコムXが受け継いだアメリカ黒人のディアスポラ意識を、ガーナが体現した汎アフリカ主義に関連させる視座を提起して、今後の研究につなげたい。

ディアスポラ意識としての汎アフリカ主義

「汎アフリカ」という語とその概念を広く知らしめた契機は、1900年7月にロンドンで開催された汎アフリカ会議（Pan-African Conference）⁸であったとされる。会議を主導したのは、ヘンリー・シルヴェスター＝ウィリアムズ（Henry Sylvester-Williams）⁹である。シルヴェスター＝ウィリアムズは、1869年にイギリス領トリニダードで、アフリカ系バルバドス移民の両親のもとに生まれた。初等教育終了後1890年までトリニダードで教職に就き、その後は、アメリカ合衆国およびカナダでの滞在を経て、法律学を学ぶ目的で1896年にロンドンに渡った。ロンドンで多くの黒人と面識をもったシルヴェスター＝ウィリアムズは、1898年にアフリカ系人のみから成る「アフリカ協会（African Association）」を創設した。この協会が中心になって会議の準備が整えられ、1900年7月、ロンドンにおいて汎アフリカ会議が開催の運びとなった。議長には、アメリカ人で、アフリカン・メソジスト監督シオン教会主教であるアレクサンダー・ウォルターズ（Alexander Walters）が選任された。

会議には、イギリス在住の黒人に加えて、カリブ海地域、アフリカ、北米から30余名の代表が参加し、イギリス領植民地およびアメリカ合衆国においてアフリカ系人の権利が剥奪されている点に関して、幅広い観点からの報告と討論がなされた。とりわけ、当時南ア戦争のさなかにあった南アフリカにおいて、先住民（アフリカ人）に対してとられていた侵略的な政策が、問題として取りあげられた。この問題については、汎アフリカ会議名でヴィクトリア女王宛に請願書が提出された¹⁰。

会議ではまた、アフリカに対する偏見を払拭すべく、アフリカの輝かしき歴史と文明が声高に語られた。「未開のアフリカ」や「アフリカ人（あるいは黒人）の劣等性」という言説は、19世紀後半に

興隆した人種主義学説という「科学」に後押しされる形で、当時のヨーロッパやアメリカで一般に流布していた。

会議は、「世界諸国民に向けて」と題された決議の採択で幕を閉じた。決議文の起草者は、決議委員長を務めたW・E・B・デュボイスであった。「20世紀の問題は、カラー・ラインの問題である」という有名な一節を含むこの決議文では、「人種差別の撤廃、英領植民地における信頼に足る統治機構の発足、アメリカ黒人に対する抑圧の終結」¹¹が求められた。

会議後に、「汎アフリカ協会 (Pan-African Association)」が新設され、ウォルターズが会長に、デュボイスが副会長に、シルヴェスター＝ウィリアムズが書記長にそれぞれ選出された。協会の設立にあたって、汎アフリカ会議を以後二年ごとに開催する旨が合意されたが、結果的には、二年ごとの会議開催は実現しなかった。「汎アフリカ」を冠する次の会議の開催は、1919年の第一回汎アフリカ会議 (1st Pan-African Congress)¹²を待つことになる。1900年の会議を主導したシルヴェスター＝ウィリアムズは、1919年の会議の実現を見ることなく、1911年に他界した。

1919年の汎アフリカ会議開催の立役者となるのが、デュボイスであった。彼は、1900年の会議について、自身が深く関わったにもかかわらず、高く評価していない。1900年の会議が「『汎アフリカ』という語を広く世に知らしめる契機になった」¹³ことを評価しつつも、「会議がアフリカにほとんど根をおろしておらず、〔汎アフリカ主義という〕運動と思想は以後しばらくの間死んだも同然であった」¹⁴と酷評している。とりわけ、彼が、「〔汎アフリカ主義が〕死んだも同然」であった理由を、1900年の汎アフリカ会議が「アフリカにほとんど根をおろさなかった」ことに求めている点は重要である。

デュボイスは、同じ文章のなかで、1900年の会議に出席した30余名の「ほとんどがイギリスか西インド諸島」からの参加者であり「わずかに北米の黒人」がいたと述べている¹⁵。会議の主導者は、それなりに国際色に富んでいた。ともにアメリカ人であるウォルターズが議長を、デュボイスが決議委員長を務め、副議長を務めたのは、ハイチのシルベイン (Benito Sylvain) とリベリアのジョンソン (F.R.S. Johnson) であった。しかし、西インド諸島人であるシルヴェスター＝ウィリアムズが企画の中心となり、イギリス領植民地における先住民が抱える問題の解決を主たる目的に掲げ、ロンドンで開催された1900年の汎アフリカ会議が、イギリス色の濃いものであったことはまちがいない。たとえば南アフリカにおける先住アフリカ人の窮状を、イギリス女王に宛てた請願書によって解決しようとした姿勢には、1900年の汎アフリカ会議が、あくまでイギリス帝国を中心に据えていたことがうかがえる。

ただし、会議が採択した決議文に「イギリス領植民地における信頼に足る統治機構の発足」と並んで「アメリカ黒人に対する抑圧の終結」が盛り込まれている点は、見逃せない。起草者であるデュボイスが、「汎アフリカ」に包含される、イギリス帝国を越えた「国際的」な本質を、この時点ですで見据えていたことを示唆していると言えよう。その意味で、デュボイスは、まさに「カラー・ライン」の問題を重視していた。

「汎アフリカ」が「カラー・ライン」の問題として、その国際的な本質を露わにしたとき、汎アフリ

リカ主義は、アメリカ合衆国の黒人にとって、自分たち自身の問題となる。デュボイスは、1900年の汎アフリカ会議の時点で、早くもこの点に気づいていたと言える。

デュボイスの慧眼の背後には、それを受け入れることができた黒人層の成熟が想定できる。デュボイスのように高等教育の機会に恵まれて、当時の世界情勢を十分に把握できた「才能のある十分の一」の黒人たちの間には、南部におけるジム・クロー体制や北部における人種の棲み分けを、ヨーロッパ植民地主義に基づき侵略され人種的に差別されるアフリカ人の窮境に連れてとらえる視点が、醸成されつつあった。大西洋の両岸に住むアフリカ系人を結ぶ、「ディアスポラ意識」であった。こうしたディアスポラ意識に支えられて、デュボイスは、汎アフリカ主義が「死んだも同然」であったと彼自身が評した1900年からの19年間を通じて、汎アフリカ主義をアメリカ黒人共同体が抱える問題と関連させるべく、国内外で精力的に活動した。

デュボイス¹⁶ と汎アフリカ会議

1919年の汎アフリカ会議は、第一次世界大戦終結後のパリ講和会議と時を同じくして開催された。前述したように、この会議を開催に導いたのはデュボイスであった。ここでは、デュボイスが第一次世界大戦の勃発に際してあきらかにした立場と関連づけながら、彼が主導した1919年の汎アフリカ会議について論じる。

第一次世界大戦に対するデュボイスの立場は、戦争勃発当初から明白であった。1914年7月の開戦後まもなく、デュボイスは、「全国黒人地位向上協会（National Association for the Advancement of Colored People、以下 NAACP と記す）」の機関誌『クライシス（The Crisis）』において、ドイツ帝国の人種主義を糾弾して、連合国側を支持する立場を公表した¹⁷。しかしながら、これは、彼がイギリスやフランスなど連合国による植民地支配の強化を容認、あるいは看過したことを意味しない。デュボイスは、この戦争が、ヨーロッパ列強によるアフリカ植民地争奪戦としての一面をもつことを見抜き、これを批判する姿勢をもみせた。たとえば、1915年に発表された論説のなかで、デュボイスは、バルカン半島の問題を戦争のきっかけにすぎないと断じ、「アジアやアフリカにおける資源と労働力の所有権の争奪」こそが、ヨーロッパの戦争の要因であると指摘している¹⁸。こうした記述からは、デュボイスの連合国支持が、連合国に寄せる全幅の信頼から生じたわけではないことがわかる。

1917年4月にアメリカ合衆国が参戦するやいなや、デュボイスは、「結束せよ」と題された一文を『クライシス』誌上で発表し、アメリカ黒人に戦争遂行への協力を呼びかけた。このなかで彼は、「ドイツ帝国に象徴される力が、黒人およびすべての有色人の大志、すなわち平等、自由、民主主義への情熱を死に至らしめる」と指摘して、「この戦争が続く間は〔国内における〕不遇に目をつぶり、民主主義のために、アメリカ合衆国の白人や連合国と結束して攻撃に応じる」¹⁹ よう、アメリカ黒人に求めた。

第一次世界大戦中のこのような見解を、デュボイスが後に誤りであったと認めたことはよく知られている。「民主主義のための戦争」が、アメリカ黒人に民主主義をもたらさなかったことは、あきら

かであった。しかし、第一次世界大戦を経て、アメリカ合衆国の黒人の思想と運動は、確実に国際性を持ち始めた。この点において、「黒人およびすべての有色人」が持つ共通利害の存在を、活字媒体を駆使して主張したデュボイスの功績は大きい。デュボイスによる戦争協力への呼びかけに対しては賛否両論²⁰があった。とはいえ、彼が提起した視座、すなわちアメリカ黒人が抱える問題を、ドイツ帝国の人種主義に象徴される植民地の問題と重ねる視座は、『クライシス』などの活字媒体を購読する黒人知識層に浸透した。戦後、パリ講和会議と同時に開催された1919年の汎アフリカ会議までには、会議を歓迎し高く評価できる黒人層が、アメリカ合衆国内でさらに育っていたと考えられる。

1918年11月に第一次世界大戦が終結すると、翌12月にデュボイスはフランスに渡った。渡仏の目的は、黒人の状況調査とパリ講和会議出席であった。彼は、「公式の資格も、コネもなかった」が、フランスに向かったときからすでに「汎アフリカ会議を召集し、ヴェルサイユでの講和会議に集った代表に、今後の世界におけるアフリカの重要性を印象づけようと考えていた」²¹と回顧している。

デュボイスの働きかけに対して、当初フランス政府の対応は好意的ではなかった。しかし、デュボイスは、ブレイズ・ディアニュ (Blaise Diagne) をつうじて、二ヶ月後にクレマンソー首相からパリにおける会議開催の承諾を取りつけた。ディアニュは、1914年に仏領西アフリカではじめてフランス下院議員に選出されたセネガル人であった。彼は、大戦中にフランス共和国のための黒人兵徴募にあたり、その功績を高く評価されて、1919年当時はフランス政府の植民地次官を務めていた。

1919年2月、ヴェルサイユで開催された講和会議と同時に、デュボイスが組織した第一回汎アフリカ会議が開催の運びとなった。ディアニュが会議の議長を、デュボイスが書記を務めた。会議には、世界15ヶ国から57名の代表が出席した。出席者には、アフリカ人が12名、アメリカ人が16名、西インド諸島人が21名含まれていたが、その大半はフランス在住者であった。アメリカ合衆国やイギリス、フランスなどの宗主国が、会議出席者へのビザ発給を拒んだ結果であった。

会議に先立って、1919年1月19日付け『シカゴ・トリビューン』紙に、前年12月30日付けのパリ発至急報が掲載された。そこには、デュボイスがウィルソン大統領に提出した覚書の内容として、「デュボイス博士の夢は、平和会議が、民族を越えたアフリカ (internationalized Africa) 建設の一助となることである」という記述がある。続けて、このアフリカ建設の具体案が、デュボイスの希望として示される。アフリカ建設の基盤には、まず旧ドイツ領の100万平方マイルの土地と1250万人の人員が充てられる。さらに交渉によって、ポルトガル領アフリカの80万平方マイルと900万人、およびベルギー領の90万平方マイルと900万人のコンゴ人が加えられることが見込まれ、その結果250万平方マイル〔以上〕の土地と2000万人を越える人口を擁するアフリカが創設されるというものであった²²。汎アフリカ会議の開催にあたって、デュボイスが、戦後のアフリカ大陸に「アフリカ人のためのアフリカ」²³を建設するという具体的な目標をもっていたことがわかる。

実際の会議では、旧ドイツ領植民地について、これを連合国の手に委ねずに国際機関の信託統治下に置くべきであると主張されるに留まった。ただし、会議で採択された決議文のなかには、アフリカ先住民の「国家」に関する原則が、以下のように述べられている。「〔アフリカ先住民が〕各地域あるいは部族の政府に参加する権利は直ちに認められるべきであり、〔中略〕こうした形での政治参加

は、先住民が高い教育を受け、場数を踏んでいくなかで、徐々により大きな政体への参加に発展していくべきである。最終的にアフリカは、アフリカ人による合意のもとに支配されるべきである」²⁴。ここには、アフリカ植民地独立のあるべき形が、まず各地域や部族の自治の回復、その後に「アフリカ人によるアフリカ支配」の実現として示される。ここに見られる統一体としてのアフリカの建設こそ、デュボイスらの汎アフリカ会議が目指した、汎アフリカ主義の具体的な目的であった。

さらに決議文はこう結ばれる。「アフリカ先住民が国家から不公正な扱いを受けたり、あるいは国家が故意に教養ある黒人市民を政治や文化から締め出そうとするときには、国際連盟は、その事実を、文明化された世界に知らしめる義務を持つ」²⁵。ここには、「アフリカ先住民」と、国家から故意に排除された「教養ある黒人市民」としてのアメリカ黒人を結ぶ視点が読みとれる。

デュボイスをはじめ国際色豊かな指導者に組織された汎アフリカ運動は、その後、1921年にロンドン、ブリュッセル、パリの三都市で開催された第二回会議、1923年にロンドンとリスボンで開催された第三回会議、1927年にニューヨークで開催された第四回会議へとつなげられていった。しかし、1929年にアフリカ大陸ではじめてとなるチュニスで開催予定であった第五回会議は、宗主国フランスの許可を得られず、開催に至らなかった。さらに同年10月に始まった世界恐慌の影響も加わり、汎アフリカ運動は勢いを失った。五回目の汎アフリカ会議が開催されるのは、第二次世界大戦後1945年である。

デュボイスは後に、「汎アフリカ運動は1921年〔の第二回汎アフリカ会議〕以後、基盤を失い」、それゆえに1929年のチュニスでの会議開催に希望を託したことを、回想している²⁶。デュボイスは、アメリカ人として、アメリカ黒人をアフリカに重ねるディアスポラの視点を忘れることはなかった。しかし、彼は、汎アフリカ主義の主体をあくまでもアフリカ人であると考えていた。なぜなら、彼は、文字どおり「アフリカ人のためのアフリカ」を構想していたからである。しかしながら、デュボイスが強く希望していた1929年のチュニスにおける会議の開催は、前述のような理由で適わなかった。こうした意味を込めて、デュボイスは後年、「汎アフリカの理念は、第二次世界大戦さなかまでの20年間、あきらかに忘れられていた」²⁷と指摘している。

ガーヴェイ運動と汎アフリカ主義

汎アフリカの理念が「忘れられていた」と、デュボイスが評したまさにその時期に、アメリカ合衆国では、ジャマイカ出身のマーカス・ガーヴェイによる、アフリカ帰還運動が展開していた。1920年代に急速に発展したこの運動は、とりわけ黒人大衆に、アフリカとのつながりを意識させ、アフリカ系人としての自覚をうながした。換言すれば、ガーヴェイ運動は、黒人大衆のディアスポラ意識をよび起こすことに、大きく貢献した。

ガーヴェイ²⁸は、1887年にイギリス領ジャマイカで生まれた。印刷工見習いから身を起こし工場長にまで昇進したが、労働運動に関与したために職を追われた。こうした体験をとおして政治意識に目覚めた彼は、労働者の一団に加わり中南米各地を転々としながら、植民地の黒人労働者の窮状をイ

ギリス植民地議会に訴える活動を続けた。その後、イギリスにおける黒人の状況を自ら視察する目的で、1912年にロンドンに渡った。

第一次世界大戦勃発前夜ロンドンに集った世界各地の植民地人と接触するなかで、ガーヴェイは、自ら「黒人種の指導者 (race leader) になる」²⁹ 決意をした。1914年にジャマイカに帰国すると、「万国黒人地位改善協会およびアフリカ共同体連盟 (Universal Negro Improvement Association and African Communities League、以下 UNIA と記す)」を設立した。組織の命名には、「世界中の黒人」と「アフリカ」を結びつける意図がうかがえる。UNIA 設立の目的は、「世界中のすべての黒人をひとつにまとめあげて、真に黒人のものと言える国家と政府をつくる」³⁰ ことであった。

UNIA は、ジャマイカで創設された組織であったが、アメリカ合衆国においてその本領を發揮した。ガーヴェイは、1916年にアメリカ合衆国に渡り、翌1917年にニューヨークのハーレムに UNIA の支部を開設した。まもなくハーレム支部は、UNIA 本部に昇格した。アメリカ合衆国において会員が激増したためであった。

ガーヴェイは、1919年6月に、株主を黒人に限ったブラック・スター汽船株式会社を設立した。並行して、アメリカ黒人をアフリカに移住させる準備に着手した。1920年半ばから1924年6月まで四度にわたり、UNIA の代表団や専門家団体がリベリア共和国に派遣され、リベリア政府と植民計画について交渉した。リベリアは、1820年代にアメリカ植民協会が自由黒人や解放奴隷を移住させる目的で築いた植民地を起源とし、1847年に黒人共和国として独立していた。それ以来、ヨーロッパ列強の植民地支配を受けずに存続してきたが、経済的には苦境に陥っていた。UNIA がリベリアを経済的に援助し、かつこの地にアメリカを含む世界各地の黒人を移住させて、強大な黒人国家を建設するというのが、ガーヴェイの構想であった。

しかし、リベリア政府と UNIA の交渉はガーヴェイの思惑どおりには運ばなかった。1924年6月に派遣された第四次代表団は、リベリア到着後に全員が身柄を拘束されて、強制送還となった。同年7月に別便でリベリアに到着した移住地建設用の資材も、すべて没収された。こうして、ガーヴェイによるアフリカ帰還運動は挫折した。

リベリアにおける領土獲得を目指して、リベリア政府との交渉を続けるいっぽうで、アメリカ国内では、1920年に開催された第一回 UNIA 国際大会で「世界黒人人権宣言」が採択された。このなかで「アフリカ共和国」の成立が早々と宣言されて、当座の「臨時大統領」にガーヴェイが就任する旨が発表された。建国宣言の後、共和国の三色旗が翻るなかを、揃いの軍服に身を包んだ「アフリカ軍団」や「黒十字看護隊」が隊列を組んで行進し、「エチオピア、我が祖国」と題するアフリカ共和国の国歌が高らかに奏でられた³¹。

こうした式典は、軽佻浮薄という謗りを免れなかったにしても、ガーヴェイ運動の本質を内在させていた点は見逃せない。つまり、ガーヴェイが UNIA 創設時から一貫して「[黒人の] 政治的な独立」を求めてきた³² 点である。失敗に帰したリベリア植民を含めて、この点に関してガーヴェイの立場が終始一貫していたことは、黒人の政治的な独立についての言及が、彼の著作の随所に見られることからわかる。

たとえば、1922年に発表された「黒人問題の真の解決策」と題する論文で、ガーヴェイは、「アフリカを外国の搾取から解放し、〔中略〕我々自身の国家、世界中に散らばった我が人種を庇護できる強大な国家を建設する」³³ことこそが、問題の解決策であると主張している。これは、UNIAの設立目的にも重なる。この主張から読みとれるように、ガーヴェイが目指す黒人の政治的独立とは、アメリカ黒人を含めて「世界中に散らばった」黒人、すなわちブラック・ディアスポラのための国家建設を意味した。リベリアへの植民計画は、「〔世界中の黒人を〕庇護する強大な国家」の建設を目的として進められており、ガーヴェイはこれを「アフリカ人のためのアフリカ」³⁴と呼んだ。

デュボイスと同様に、ガーヴェイもまた「アフリカ人のためのアフリカ」を掲げた。しかし、両者の主張には、明確な相違がある。デュボイスが構想した「アフリカ人のためのアフリカ」は、アフリカ大陸に住むアフリカ人を統合して、アフリカ人の国家を建設することを意味した。それは、アフリカのほぼ全土がヨーロッパ列強に分割統治されていたこの時代にあつて、植民地独立の理想的な形態として提起された。これに対して、ガーヴェイが言う「アフリカ人のためのアフリカ」は、「黒人種によるアフリカの植民地化」であり、「我々の祖先の土地に、黒人帝国を築くこと」³⁵であった。言い換えれば、世界中に散らばったアフリカ系人をアフリカに帰還させて、アフリカ大陸にブラック・ディアスポラの国家を建設することを意味した。ガーヴェイがこれを「アフリカ人のためのアフリカ」と呼んだのは、「アフリカ人と、アメリカや西インド諸島の黒人には、まったく違いがない」³⁶という前提に基づいていた。

デュボイスは、ガーヴェイ運動を「大衆の運動であり、知識人の運動ではない」と切り捨てる姿勢をみせた。「熟慮には欠け、しかし、きわめて真剣な決意で、世界中の黒人をまとめあげる」ことを目指すガーヴェイ運動は、あくまでも「ガーヴェイの煽動」であり、汎アフリカ運動と一線を画すものとみなした³⁷。汎アフリカ主義者として汎アフリカ会議を主導し続けてきたデュボイスの立場は、理解できる。しかしながら、アメリカにおける大多数の黒人大衆にとってみれば、ガーヴェイが描く「アフリカ人のアフリカ」こそが、自分たちの「アフリカ」であり、それゆえに支持すべき理想として映ったことは確かであろう。

ガーヴェイ運動が、黒人大衆の動員に成果をあげたことはまちがいない。UNIAは、ニューヨークに進出してから3年あまりで、会員数を200万人に増やした。1920年8月までには400万人に膨れあがり、1921年になると、世界中に900の支部と約600万人の会員を擁する組織に成長した³⁸。会員数はすべてガーヴェイ自身による概算であるため、誇張の可能性は差し引かねばならないが、それでもなお数字が示す意味は大きい。UNIA会員数のうち、1920年時点の400万人を例にとれば、当時の黒人人口³⁹の4割が、1919年時点の200万人を例にとったとしても、アメリカ合衆国における黒人の2割がUNIAの会員であったことになる。ガーヴェイ運動は、当時、アメリカの黒人大衆にもっとも浸透し、黒人大衆にディアスポラ意識を定着させることに、もっとも成果をあげた運動であると言って差し支えない。

汎アフリカ主義のアフリカ化

後にガーナを独立に導いたクワメ・エンクルマもまた、若き日にガーヴェイの思想から強い影響を受けたひとりであった。エンクルマは、「アメリカ留学時代に読んだすべての本のなかで、1923年に出版された『マーカス・ガーヴェイの哲学と思想』に、もっとも強く情熱を燃やした」⁴⁰と『自伝』に記している。そして、ガーヴェイの「『アフリカ人のためのアフリカ』という哲学」が「1920年代のアメリカの黒人たちを強く鼓舞した」⁴¹ことを指摘した。

しかし、エンクルマは、同じ『自伝』の後の部分で、ガーヴェイ運動を批判している。ガーヴェイが「ブラック・ナショナリズムを、アフリカ・ナショナリズムに対立するものとしてとらえた」⁴²点に、ガーヴェイ運動の限界を見ている。その原因を、エンクルマは、ガーヴェイ運動が、アフリカ人の手に成る運動ではないことに帰している。さらに、アフリカ人が生み出した運動ではないという同じ理由で、1920年代に4度にわたって開催された汎アフリカ会議にも限界があったことを、エンクルマは指摘する。そのうえで、1945年にロンドンで開催された第五回汎アフリカ会議こそが、「アフリカ・ナショナリズムにあるべき道筋をつけ、〔中略〕アフリカ人のためのアフリカという大衆運動を生み出した」⁴³ことを主張した。第五回汎アフリカ会議の開催には、エンクルマ自身も深く関与した。

黄金海岸に生まれたエンクルマは、1935年から1945年までの10年間を、アメリカ合衆国ですごした。彼は、勤労学生としてさまざまな仕事に従事しながら、リンカン大学で経済学、社会学、神学の学士号を取得し、1943年にペンシルヴァニア大学から哲学修士号を授与された。第一次世界大戦後、国力をつけて民主主義の旗手を任じていたアメリカ合衆国は、宗主国であるイギリスやフランスと並んで、西アフリカからの留学生の受け入れ国になっていた。同じ時期にアフリカ各地では、「民族自決」の思想にうながされて、アフリカ人としての自覚と政治意識を強めた、勉学の意欲に燃える若い世代が育っていた。エンクルマも、そのひとりであった。

エンクルマがアメリカですごした時期は、世界史的に見れば、第二次世界大戦に至る国際情勢の緊迫期であり、汎アフリカ主義が大きく展開した時期であった。まず、エンクルマが渡米した1935年に、イタリアによるエチオピア侵略が開始され、翌1936年にエチオピアはイタリアに併合された。エチオピアをめぐるヨーロッパ列強の対応は、汎アフリカ主義の展開に大きく影響した。エチオピアは、19世紀末以降のヨーロッパ列強によるアフリカ分割の時代にあって、独立を保ち続けたアフリカの王国であり、アフリカ人にとっては自由と独立の象徴であった。そのエチオピアに、1935年10月にイタリアが侵攻すると、イギリスやフランスは、反ファシズムを掲げていたにもかかわらず、イタリア宥和策をとった。両国がファシスト国家イタリアによるエチオピア併合を許したことで、植民地のアフリカ人は宗主国に対して失望し、不信感を抱いた。ヨーロッパ列強に対する不信感は、カリブ海地域やアメリカ合衆国の黒人にも共有された。その結果、アフリカ人、アフリカ系人の団結と自助の必要性が、大西洋の両岸で強く認識されるに至った。

このような認識に基づいて、たとえばロンドンでは、ジョージ・パドモア (George Padmore)⁴⁴ や

ラス・マコネン (T. Ras Makonnen) などのカリブ海地域の汎アフリカ主義者が関与して、1937年に「国際アフリカ事務局 (International African Service Bureau、以下 IASB と記す)」⁴⁵ が立ち上げられた。IASB は、アフリカ人など植民地人の民主的な権利や自由、自決の要求を支持する組織で、アフリカ人およびアフリカ系人のみの加入が許されていた。また、アメリカ合衆国においても、イタリアによるエチオピアの侵攻と併合を契機に、「アメリカ黒人の利害と、国外における被抑圧者の利害が結びつけられるようになった」⁴⁶。歌手で活動家のポール・ロブソン (Paul Robson) を中心に 1937 年に結成された「アフリカ問題協議会 (Council on African Affairs)」など、反帝国主義を掲げるさまざまな組織が生み出された。

当時ペンシルヴェニア大学に在学中であったエンクルマは、アフリカからの留学生仲間とともに「アフリカ学生協会 (African Students Association)」を立ち上げた。彼は、この組織の委員長に就任するとともに、「民族主義の精神を復活させる」⁴⁷ ために、組織の機関誌『アフリカン・インタープリター (African Interpreter)』を刊行し、アメリカにおける政治活動を開始した。組織に加わった学生の大多数は、ナイジェリアか黄金海岸の出身であったが、当初、両者はアフリカの独立について意見を異にしたという。ナイジェリア人は、まず各植民地が独自に独立運動を展開すべきであると考えたが、エンクルマを含む黄金海岸出身者は、「領土内の団結が、究極的にはアフリカ大陸全土の解放を求める汎アフリカ運動と結びつかないかぎり、アフリカ人および世界各地に住むアフリカ系人に自由と平等はもたらされない」⁴⁸ と主張した。この記述には、アフリカの統一、およびアフリカ人と世界各地のアフリカ系人との連帯を目指す、汎アフリカ主義者としてのエンクルマの姿勢がはっきりと現れている。

エンクルマのように、アメリカの大学においてアフリカ学生協会を組織し、アフリカ人の結束をはかるべく、汎アフリカ主義に基づいた活動を展開したアフリカ人留学生は少なくなかった。戦間期にアフリカからの留学生の数が増加した事実を考慮すれば、留学生によるこうした活動は、規模のちがいはあれ、アフリカ人留学生を迎え入れた全米各地で起きていたと考えられる。アメリカ国内におけるアフリカ人の声は、1930 年代以降の国際情勢を背景に高まりつつあった、アメリカ黒人のディアスポラ意識を深化させたにちがいない。

大戦終結の年となった 1945 年 5 月に、エンクルマはロンドンに渡った。渡英の目的は法律の勉強と博士論文の完成であったが、ほどなく政治活動も再開した。アメリカ時代からその論説に感銘を受けていたパドモアと、ロンドンにおいて面識を持てたことが大きく影響した。パドモアを介して、エンクルマは、「汎アフリカ連盟 (Pan-Africanism Federation、以下 PAF と記す)」にかかわり、PAF が担っていた汎アフリカ会議の準備に携わった。PAF は、前出の IASB の会員が中心となって 1944 年に創設され、第五回汎アフリカ会議の開催を目指して、その準備作業を進めていた。パドモアは、その中心人物のひとりであった。

そもそも第五回汎アフリカ会議の開催企画は、1945 年 2 月に、ロンドンで「世界労働組合連盟 (World Federation of Trade Unions、以下 WFTU と記す)」の大会が開催された際に具体化された。同大会には、アフリカ各地からアフリカ人の組合代表が多数参加していた。これにヒントを得た PAF は、

同年9月から10月にかけてパリで開催予定であったWFTUの第二回大会に日程を重ねて、汎アフリカ会議を開催すれば、多数のアフリカ人代表を結集できると目論んだ。

他方、デュボイスやガーヴェイ夫人のエイミー・ガーヴェイなどアメリカ合衆国、カリブ海地域の汎アフリカ主義者たちは、PAFの企画とは別に、前年の1944年にすでに第五回会議の開催の必要を論じ始めていた⁴⁹。こうした経緯を反映して、1945年11月にマンチェスターで開催された第五回汎アフリカ会議の議長には、デュボイスと、PAF会長のピーター・ミリヤード（Peter Milliard）のふたりが選ばれた。PAFのパドモアとエンクルマは、共同で書記を務めた。会議には、世界中から200余名の代表が出席し、その大多数をアフリカ人が占めた。各植民地についての詳細な報告と討論の後に、デュボイスとエンクルマが執筆した宣言を採択して、会議は閉幕した。

エンクルマ自身の言葉を借りれば、「会議はアフリカ民族主義〔中略〕を思想とし、マルクス主義的社会主義を、その基本原理として採択した」⁵⁰。すなわち、この会議において、汎アフリカ主義、アフリカ民族主義、社会主義が合流したのであった。また、参加者の大多数がアフリカ人で占められていた事実が象徴するように、かつてカリブ海地域人シルヴェスター＝ウィリアムズによって創始され、アメリカ人デュボイスを中心に発展した汎アフリカ主義は、第五回会議を転機として、その主導権をエンクルマを中心とするアフリカ人に譲り渡した。以後、汎アフリカ主義は、アフリカの解放、独立、統一を求める思想・運動として、戦後のアフリカ独立運動に大きく関与していくことになる。その意味で、第五回汎アフリカ会議は、汎アフリカ主義のアフリカ化への転換点であった。

反帝国主義の戦争から冷戦へ

1930年代後半以降第二次世界大戦期にいたる国際情勢のなかで、国内外からあがったアフリカ人の声に刺激されて、アメリカ黒人はディアスポラ意識に突き動かされた。そして、アメリカ合衆国が第二次世界大戦に参戦すると、連合国が掲げるファシズム打倒を反帝国主義と読み替えて、積極的に戦争に協力した。アメリカ合衆国政府もまた、軍需産業と政府における差別的雇用を禁じた公正雇用実施委員会の設立などで、黒人たちの戦争協力に応えた。第二次世界大戦期のアメリカ合衆国において、黒人は、ファシズムに対する国際的な勝利と国内の人種差別に対する勝利を、いわゆる「ダブルV」として両立させることができた。ファシズムに対する国際的な勝利は、多くのアメリカ黒人にとって、帝国主義の終焉と植民地の解放を意味し、アフリカ系人としてのアメリカ黒人の解放に対する期待へとつながった。こうして、終戦の年に第五回汎アフリカ会議が開催されたとき、アメリカ黒人のディアスポラ意識は絶頂期を迎えていた。

戦後創設された国際連合は、植民地主義を終結させる国際機関として、汎アフリカ主義者を含む世界中の被抑圧者の期待を担った。国内における被抑圧者としてのアメリカ黒人も、例外ではなかった。彼らは、アメリカ国内における黒人問題を植民地主義と重ねてとらえ、国連が果たす役割におおいに期待した。たとえばNAACPは、アメリカ合衆国の黒人に対する人権侵害を訴える文書を、1947年に国際連合に提出している。

しかしながら、大戦中は同盟国であった米ソ間の関係が緊張して冷戦期に入ると、アメリカ黒人をとりまく状況に変化が生じた。変化の予兆は、第五回汎アフリカ会議が採択した決議のなかにすでに現れていた。決議文は、汎アフリカ主義、アフリカ民族主義、社会主義を結びつけるものであった。この会議を転換点として、汎アフリカ主義は、戦後のアフリカ独立運動と強く結びついた、アフリカの解放、独立、およびそれに続くアフリカの統一を求める思想・運動としての性格を強めたが、そこには社会主義的な色彩が色濃くつきまとっていた。

他方、冷戦下のアメリカ合衆国においては、黒人の地位向上を目指す動きに大きな弾みがついた。連邦政府は、冷戦期に、人種差別撤廃に向けて積極的な政策を打ち出した。背後には、互いに絡み合いたいいくつかの理由があった。冷戦下において国内の団結が必要であったこと、次々と独立を達成していた第三世界の新興国家をアメリカ陣営に取り込むために人種差別のイメージを払拭する必要があったこと、北部や西部の都市部において黒人有権者数が増加し、黒人票の重みが増したことなどである。

このような状況下で、アメリカ黒人が関与してきたふたつの運動、すなわち国内における市民権運動と国際的な汎アフリカ運動の両立は困難になった。第二次世界大戦期に共存しえたアメリカ黒人解放のふたつの潮流は、分化されていった。NAACP に代表される黒人運動組織や指導者の多くは、国内における黒人の市民権獲得を主眼に置いて運動を展開した⁵¹。主として法廷闘争をとおして展開された差別撤廃を図る運動が、少しずつではあっても確実に成果をあげ、1954年のブラウン判決を勝ち取るにいたる運動史は、周知のとおりである。

他方、第五回汎アフリカ会議以降も、汎アフリカ主義に忠実な立場をとったアメリカ黒人指導者が、少数ながら存在した。デュボイスに代表されるこれらのアメリカ黒人は、戦後の冷戦期においても、アフリカ諸国と連携した活動を試みた。しかし、戦後の汎アフリカ主義は、アフリカにおける独立運動として展開するなかで、マルクス主義的な色彩を強めた。少なくとも、アメリカ政府の目には、そのように映った。そのため、国内における汎アフリカ主義者は、反共政策をとるアメリカ合衆国政府に弾圧された。

デュボイスについて言えば、1951年に外国の諜報員としての容疑で連邦裁判にかけられている。釈放はされたものの、1952年から6年間アメリカ合衆国のパスポートを剥奪されて、海外渡航を禁じられた。デュボイスは、1958年に再びパスポートを手にとると、1960年にエンクルマ政権下のガーナに移住した。ガーナ在住中の1961年アメリカ共産党に入党し、これを理由にアメリカ政府にパスポートの更新を拒まれると、1963年にアメリカ国籍を放棄しガーナ国籍を取得した。同年8月、汎アフリカ主義者デュボイスは、ガーナ人として天寿を全うし、ガーナで埋葬された。95年の生涯であった。

海外で活動することを許されず、国内での黒人運動の主流に関わることもなかったデュボイスの晩年は、アメリカ黒人史のなかで多くを語られない。しかし、デュボイスがガーナで従事した、彼の最後の仕事が『アフリカ百科事典 (African Encyclopedia)』⁵²の編纂であったことは、デュボイスが、第五回汎アフリカ会議以降も汎アフリカ主義に忠実であったことを示している。エンクルマ政権下で企画された、アフリカ全体を網羅するこの百科事典は、若き日よりアフリカの統一を唱え続けたエン

クルマ流の汎アフリカ主義の一つの形であった。老齡のデュボイスにとっては、世紀を跨いで唱えてきた、汎アフリカ主義の集大成でありえたにちがいない。

汎アフリカ主義者としてのマルコムX：むすびにかえて

以上で、アメリカ黒人史における汎アフリカ主義とディアスポラ意識の一潮流を概観した。最後に、マルコムXとガーナを結ぶひとつの視座を提供して、今後の研究につなげたい。

アメリカ合衆国で黒人運動の主流派がアメリカ社会への黒人の統合を目指し、デュボイスなど少数派の汎アフリカ主義者が連邦政府による弾圧を受けた冷戦期に、急速に勢力を伸ばした黒人組織のひとつが「ネイション・オブ・イスラーム (Lost-Found Nation of Islam in the Wilderness of North America、以下 NOI と記す)」⁵³ である。1934年にエライジャ・ムハンマド (Elijah Muhammad) が組織を継承したとき 1000 人ほどであった信徒数は、1959年までには、ムハンマド自身の概算によれば 25 万人、『セピア (Sepia)』誌の推計で 20 万人、『タイム (Time)』誌の推計で 7 万人⁵⁴ にのぼるとされる。ばらつきはあるものの、確実に増加していた。また、同時期までに NOI は、50 の「寺院」を擁する全米規模の組織に成長していた⁵⁵。

NOI は、アメリカ黒人を神の選民とみなして、黒人大衆の自己尊厳を回復させる一方で、黒人は、アメリカではなくアフリカ大陸に帰属すると主張した。また、信徒を雇用するために独自の農場、工場、小売店などを経営して、黒人の物的充足をはかった。こうして NOI は、ゲットーや監獄で生きる黒人貧困層を含む黒人大衆を数多く惹きつけた。この点において、NOI をガーヴェイの流儀の継承者であるとみなすことができる。ただし、ガーヴェイ運動との重要な相違点として、NOI が、奴隷として北アメリカに連行された黒人にとって、本来の宗教がイスラームであることを規定したことがあげられる。言い換えれば、NOI は、イスラームをとおして、アメリカ黒人をアフリカと結びつけた。

黒人運動の主流が市民権運動であった冷戦期において、ディアスポラ意識は、二級市民として生きる日々の苦悩のなかで、黒人の連帯の必要を肌で感じていた黒人大衆に受け継がれていた。彼らは、いわば、ガーヴェイの子どもたちとして、冷戦期のアメリカ社会において、アフリカとの繋がりを求め続けた。

市民権運動の舞台裏で大衆運動として継承されていたディアスポラ意識に、声を与えた人物こそ、マルコムXであった。マルコムXが「ガーヴェイの子ども」であったという指摘は、そもそも修辭の域を超えている。マルコムXの両親、すなわちジョージア州出身のアール・リトル (Earl Little) と西インド諸島グレナダ生まれのルイーゼ (Louise) は、ともにガーヴェイの信奉者であり、モントリオールにおける UNIA の大会で出会い結婚した。結婚後アメリカ中西部で暮らすようになって、ふたりのガーヴェイ運動への傾倒は変わらなかった。とりわけ父アールは、幼いマルコムXの記憶に残るほど深く運動に携わっていた⁵⁶。マルコムXは 1925 年生まれであるから、彼の幼少時には、ガーヴェイはすでにアメリカ合衆国を追放されていた。にもかかわらず、しかも中西部という黒人居住者がきわめて少ない地域においてすら、ガーヴェイ運動は生きながらえていた。1920 年代の一時期にガー

ヴェイによって黒人大衆に伝えられたディアスポラ意識が、いかに深く黒人大衆に根付いていたかを示す事例と言えよう。

こうして幼少時からガーヴェイ運動の遺産であるディアスポラ意識に触れていたマルコムXは、紆余曲折を経て、監獄においてエライジャ・ムハンマドの教えを受け入れた。出所後の彼は、暗殺される1年前までNOIに所属していた。1950年代後半から1960年代にいたるNOIの成長期に、マルコムXが信徒動員において大きく貢献したことは、周知の事実である。彼が、父親をとおしてガーヴェイから受け継いだディアスポラ意識は、NOIという場を得て、彼自身のなかで熟成した。そして、1964年にNOIを離脱したマルコムXが、あらたな活動に踏み出すなかで「声」を持ち、再び活性化されようとしていた。それは、デュボイスとはまた別の経路で、エンクルマに連なる汎アフリカ主義であった。

- 1 本稿では、アフリカ（主にサハラ砂漠以南のブラック・アフリカ）に住むアフリカ系人を「アフリカ人」、アフリカ以外の地域に住むアフリカ系人が自らのアフリカ起源を意識する場合には「アフリカ系人」と記す。それ以外の一般的な用法としては、「黒人」を用いる。なお、直接引用の場合は、原文に即した訳語を用いる。
- 2 Ruby M. and E. U. Essien-Udom, “Malcolm X: An International Man,” in *Malcolm X: The Man and His Times*, ed. John Henrik Clarke (New York: Collier Books, 1969; reprint, Trenton, NJ: Africa World Press, 1990), 247.
- 3 Malcolm X, *The Autobiography of Malcolm X*, 22nd ed. (New York: Grove Press, 1965; reprint, New York: Ballantine Books, 1973), 352.
- 4 *Ibid.*, 356.
- 5 Malcolm X, “The Founding Rally of the OAAU,” in *By Any Means Necessary*, 12th ed. (New York: Pathfinder Press, 1970), 38.
- 6 Shirley Graham Du Bois, “The Beginning, Not the End,” in Clarke, ed. *Malcolm X*, 125. マルコムX暗殺後に、ガーナのラジオ局が報じたシャーリー・デュボイスの談話による。
- 7 アメリカ合衆国における汎アフリカ主義の起源を19世紀初頭にまで溯り、とりわけアメリカ史上に断続的に現れたアフリカ帰還運動に辿る視点は、研究者により提起されている。（たとえば Hollis R. Lynch, “Introduction to the Atheneum Edition,” in *Philosophy and Opinions of Marcus Garvey*, ed. Amy Jacques-Garvey (New York: Atheneum, 1969) こうした視座を踏まえたうえで、本稿では、汎アフリカ会議に象徴される国際的な思想・運動として世紀転換期以降顕在化した汎アフリカ主義を論じる。
- 8 数回にわたって開催された汎アフリカ会議は、1900年の第一回会議のみが、原語で Pan-African Conference と呼ばれ、第二回以降の会議は Pan-African Congress と呼ばれる。邦語ではどちらも「汎アフリカ会議」と訳出される通例にならない、本稿でもとくに区別をしない。
- 9 シルヴェスター＝ウィリアムズについては、Marika Sherwood, “Henry Sylvester Williams,” in *Pan-African History: Political Figures from Africa and the Diaspora since 1787*, ed. Halim Adi and Marika Sherwood (New York: Routledge, 2003) および小田英郎「カリブ海の初期パン・アフリカニストたち：シルヴェスター＝ウィリアムズとマーカス・ガーヴィー」矢内原勝・小田英郎編『アフリカ・ラテンアメリカ関係の史的展開』（平

-
- 凡社、1989)を参照した。
- 10 請願に対しては、アフリカ先住民の福利に配慮するという女王からの回答が、ジョゼフ・チェンバレン植民地相によって後日示された。しかし、イギリスは、南ア戦争終結後、それまで敵対していたブーア人と手を結び、有色人種差別政策を打ち立てていった。
- 11 Sherwood, 192.
- 12 注8を参照のこと。なお、デュボイスを含めた会議の主導者たちは、1900年の汎アフリカ会議 (Pan-African Conference) を別扱いにして、1919年の汎アフリカ会議 (Pan-African Congress) を第一回、以後の会議 (Congress) を第二、第三・・・と数える。本稿もこれにならう。
- 13 W. E. Burghardt Du Bois, *The World and Africa: An Inquiry into the Part Which Africa Has Played in World History*, An Enlarged Edition (New York: International Publishers, 1965), 7.
- 14 Ibid., 8.
- 15 Ibid., 7.
- 16 第一次世界大戦期のデュボイスの活動については、横山良「黒人の市民的自由を求める闘い---NAACPとW・E・B・デュボイスを中心に」今津晃編著『第一次大戦下のアメリカ』(柳原書店、1980)から、デュボイスのアフリカへの関心については、竹本友子「W・E・B・デュボイスとアフリカ」『西洋史論叢』(早稲田大学西洋史研究会)16(1994)から示唆を得た。デュボイスの活動と思想については、以下の著作も参照した。Gerald Horne, *Black & Red: W.E.B. Du Bois and the Afro-American Response to the Cold War 1944-1963* (Albany, NY: State University of New York Press, 1986); Leslie Alexander Lacy, *Cheer the Lonesome Traveler: The Life of W.E.B. Du Bois* (New York: Dial Press, 1970); Manning Marable, *W.E.B. Du Bois: Black Radical Democrat*, New Updated Edition (Boston: Twayne Publishers, 1986; Boulder, CO: Paradigm Publishers, 2005).
- 17 W.E.B. Du Bois, *Dusk of Dawn: An Essay toward an Autobiography of a Race Concept* (New York: Harcourt, Brace and Co., 1940), 252.
- 18 W.E.B. Du Bois, "The African Roots of War," in *Black Titan W.E.B. Du Bois: An Anthology by the Editors of Freedomways*, ed. John Henrik Clarke, Esther Jackson, Earnest Kaiser, and J.H.O'Dell (Boston: Beacon Press, 1970), 280. 原文は、*Atlantic Monthly* 115 (May 1915) に掲載された。
- 19 W.E.B. Du Bois, "Close Rnaks," in *African American Political Thought 1890-1930: Washington, Du Bois, Garvey, and Randolph*, ed. Cary D. Wintz (Armonk, NY: M.E. Sharpe, 1966), 116. 原文は、*The Crisis* 16 (July 1918) に掲載された。
- 20 デュボイスによる戦争遂行への協力要請は、ジム・クロー体制やリンチなど国内で多くの問題を抱えていたアメリカ黒人から、強い批判を浴びた。批判は NAACP 内部でも起きた。1918年6月にデュボイスに対して参謀本部情報局への勤務が陸軍省から要請されると、デュボイスと当局との連携が疑われ、批判はさらに大きくなった。この人事は、結局撤回された。
- 21 Du Bois, *The World and Africa*, 8.

-
- 22 Ibid., 8-9. 『シカゴ・トリビューン』紙の記事の引用は、デュボイス自身による。
- 23 Ibid., 9.
- 24 Ibid., 11-12.
- 25 Ibid., 12.
- 26 Ibid., 243.
- 27 Ibid.
- 28 ガーヴェイについては、主に以下を参照。E. David Cronon, *Black Moses: The Story of Marcus Garvey and the Universal Negro Improvement Association* (Madison, WI: The University of Wisconsin Press, 1955); Amy Jacques-Garvey, ed. *Philosophy & Opinions of Marcus Garvey, Volume I & II* (1923,1925; New York: Atheneum, 1969); Judith Stein, *The World of Marcus Garvey: Race and Class in Modern Society* (Baton Rouge, LA: Louisiana State University Press, 1986)
- 29 Marcus Garvey, "The Negro's Greatest Enemy," in Amy Jacques-Garvey, Volume I, 126.
- 30 Ibid.
- 31 Cronon, 66-70.
- 32 Marcus Garvey, "The Difference Between the U.N.I.A. and Other Organization," in Amy Jacques-Garvey, Volume II, 97.
- 33 Marcus Garvey, "The True Solution of the Negro Problem---1922," in Amy Jacques-Garvey, Volume I, 52.
- 34 Marcus Garvey, "Africa for Africans," in Amy Jacques-Garvey, Volume I, 68.
- 35 Ibid.
- 36 Marcus Garvey, "Oneness of Interests," in Amy Jacques-Garvey, Volume I, 70-71.
- 37 Du Bois, *The World and Africa*, 239.
- 38 Marcus Garvey, "The Negro's Greatest Enemy," 130-131.
- 39 1920年の国勢調査によれば、アメリカ合衆国の人口は1億571万人であり、黒人人口は、そのうちの9.9%を占める1046万人であった。(アメリカ合衆国国勢調査局ホームページ <http://www.census.gov/population/www/documentation/twps0029/tab68.html> (2010.2.21)を参照)
- 40 Kwame Nkrumah, *The Autobiography of Kwame Nkrumah* (London: Thomas Nelson and Sons, 1957), 45.
- 41 Ibid.
- 42 Ibid., 53-54.
- 43 Ibid., 54
- 44 当時、代表的な汎アフリカ主義者として活躍していたパドモアは、1927年に共産党に入党しており、1930年代はじめにコミンテルンが黒人労働運動を疎外し始めるまでは、「ブルジョア的」な汎アフリカ会議やガーヴェイ運動に批判的であった。しかし、次第にコミンテルン批判を強めたパドモアは、1934年にこの国際組織を追放され、その前後から、デュボイスらの汎アフリカ運動に積極的に接近するようになった。この点については、小田英郎「移行期のパン・アフリカニズムとジョージ・パドモア：カリブ海の一パン・アフリカニストの思想

-
- と行動」矢内原勝・小田英郎編『アフリカ・ラテンアメリカ関係の史的展開』（平凡社、1989）に詳しい。汎アフリカ主義と共産主義の接点を分析することは、アメリカ合衆国における汎アフリカ主義研究には欠かせないが、紙幅の制限により、別稿に譲りたい。
- 45 IASB については、小田「移行期のパン・アフリカニズム」191-193 頁を参照。
- 46 Penny M. Von Eschen, *Race Against Empire: Black Americans and Anticolonialism, 1937-1957*, (Ithaca, NY: Cornell University Press, 1997) 11. 引用は、ポール・ロブソンのことば。
- 47 Nkrumah, 43.
- 48 Ibid., 44.
- 49 P. Olanwuche Esedebe, *Pan-Africanism: the Idea and Movement, 1776-1991*, 2d ed.(Washington DC: Howard University Press, 1982), 137.
- 50 Nkrumah, 53.
- 51 上杉忍『二次大戦下の「アメリカ民主主義」』（講談社、2000）は、戦時中の 1943 年末ころまでに、すでに黒人団体の大半がこのような方向性を目指していたことを指摘している。(179-181 頁)
- 52 事典の編纂事業は、1963 年のデュボイスの死と、1966 年のエンクルマの政治的失脚の結果、中断を余儀なくされた。1999 年にアメリカで刊行された『アフリカーナ』（Kwame Appiah and Henry L. Gates, Jr., eds. *Africana: The Encyclopedia of the African and African American Experience*. New York: Basic Civitas, 1999）は、デュボイスの夢の実現として、アメリカのメディアでもてはやされた。他方、ガーナでは、デュボイスとエンクルマの真の意志を受け継ぐ事業として、両者の息子たちが中心になり、アフリカに焦点を当てた『アフリカーナ』の編纂が別個に立ち上げられた。こちらの事典は、現在もお編纂中である。（アフリカーナプロジェクトのホームページ <http://www.endarkenment.com/eap/> (2009.11.12)を参照)
- 53 NOI については、E. U. Essien-Udom, *Black Nationalism: A Search for an Identity in America*, (Chicago: The University of Chicago Press, 1962; reprint,1971); C. Eric Lincoln, *The Black Muslims in America*, 3rd ed. (Boston: Beacon Press, 1961)を参照。マルコム X と NOI、マルコム X とイスラームについては、大類久恵『アメリカの中のイスラーム』（子どもの未来社、2006）で論じた。
- 54 E. U. Essien-Udom, 4-5.
- 55 Ibid.
- 56 Malcolm X, *The Autobiography*, 6-7.

Pan-Africanism in African American History: A Preliminary Approach to Examine Malcolm X' s Final Vision

Hisae Orui

Abstract

In May, 1964, Malcolm X visited Accra, Ghana for the first time in his life and met the country's president Kwame Nkrumah. Malcolm was so impressed by Nkrumah's Pan-African vision that he launched a political organization, the Organization of Afro-American Unity, in order "to unite everyone in the Western Hemisphere of African descent into one united force," and furthermore "to unite with our brothers on the motherland." Malcolm's vision, embodied in his newly established political organization, would never be realized, as he was to be assassinated half a year later. This paper is a preliminary approach to examine Malcolm X's final, unfinished vision as Pan-Africanism in the larger context of African American History.

The analysis begins with the Pan-African Conference held in 1900, with Henry Sylvester-Williams as its organizer and W. E. B. Du Bois as Chairman of the Committee on Address to the Nations of the World. It was DuBois who organized the first Pan-African Congress in 1919, as well as the three following congresses during the 1920's. However, Du Bois was not satisfied with the four congresses because "the Pan-African idea was still American rather than African." Simultaneously, in the United States, an American idea of "Africa for the Africans" had been promoted by Marcus Garvey. Garvey's philosophy and movement inspired the masses of African Americans so much that even Kwame Nkrumah, who as a student came to the United States a decade later when Garvey had long been deported, still felt the enthusiasm Garvey's movement had ignited. However, Nkrumah later exercised the critique that "Garvey's ideology was concerned with black nationalism as opposed to African nationalism." Nkrumah, with other new African leaders, helped to hold the fifth Pan-African (Manchester) Congress in 1945. It was this fifth Congress that shaped post-war Pan-Africanism as African nationalism, adopting Marxist socialism as its philosophy. Meanwhile, in the United States, with the onset of the Cold War, the majority of the African American leaders focused on the civil rights movement, while Pan-Africanists, including Du Bois, were persecuted by the government. It was also during this time that the Nation of Islam (NOI) grew its membership, stirring the African consciousness of the African American masses. Malcolm X joined the organization in 1952 and stayed as the most famous spokesperson until his secession from NOI in 1964. It was during the final year of his life, after leaving NOI, when he visited Ghana and met Nkrumah.